



第6回年会特集 第2弾 ～ 年会に参加して～

若手研究者の方々から、年会に参加した感想を寄せていただきました。

▶ 2012年5月14～15日に東京で開催された第6回エピジェネティクス研究会年会に参加させて頂きました。エピジェネティクス研究会には初めて参加させて頂きましたが、基礎から応用研究まで様々な研究分野における最新の研究発表と活発な議論がなされ、とても刺激を受けました。個人的には、日野信次郎先生(熊本大学発生医学研究所)のFAD依存性ヒストン脱メチル化酵素LSD1によるエネルギー代謝に関するご研究や小川佳宏先生(東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科)のマウス胎生期における高脂肪食負荷によるDNAメチル化を介したGPAT1の発現制御機構に関するご研究について大変興味深く拝聴いたしました。今後、細胞内代謝や栄養環境に起因するエピゲノム変化の分子機構がさらに明らかにされると共に、それらに基づいたヒト疾患の病態解明が期待されると感じました。また、岡本晃充先生(東京大学大学院工学研究科)のタングステン酸化剤を利用した5-ヒドロキシメチルシトシンの検出法や谷口正輝先生(大阪大学産業科学研究所)の一分子ナノポアシークエンシング技術の開発といった次世代の解析技術についても非常に感銘を受けました。これらの解析技術が利用され、一細胞、一分子レベルでのエピゲノム変化の解析が可能となり、そこから新たな知見がどんどん出てくるのではないかと思います。

(愛知県がんセンター研究所 分子腫瘍学部  
研究員  
勝島 啓佑)

▶ 同会場で開催された第3回年会以来、3年ぶりに年会に参加しました。今回の年会の率直な感想として、このエピジェネティクス研究会年会が魅力的でますます面白くなってきているとの印象を受けました。私のみならず他の複数の研究者からも同様の感想が聞かれました。このようにエキサイティングな年会が開催されている背景にはエピジェネティクスが現在最もホットな研究分野の一つであることはもちろんですが、歴代の年会長をはじめエピジェネティクス研究会を運営されてきた諸先生方のご尽力の賜物であると感じます。また、特に若い研究者が多く参加し、ポスター発表などで活発な議論をしているのもこの年会の素晴らしい点だと思います。

私は植物のエピジェネティクスをテーマとして研

究を行っておりますが、個人的にエピジェネティクス研究会年会に参加する大きな目的の一つには、特に動物のエピジェネティクスなど自分の分野外で普段はなかなかカバーしきれない分野の最新の知見の収集があります。そういった点で今回の年会の様に1つの会場にいながら第一線で活躍されている先生方から幅広く最新の研究成果の発表を聞くことができるのはなんとも贅沢で大変有り難いことだと感じます。今後、会員数の増加や研究分野の発展にともなって研究領域が細分化されていくことはやむを得ないのかもしれませんが、出来ればこの一会場ですべての発表を行うスタイルは継続していただきたいと思います。また、今回のThomas Jenuwein博士のように海外の著名な研究者を招いて講演してもらうことも今後の日本のエピジェネティクス研究の発展に重要であると感じます。年会参加者が特に哺乳類を対象としたDNAメチル化の研究に大きく偏っているという指摘は例年このニュースレターの年会報告でも散見されますが、研究者人口をある程度反映したものと考えるとやむを得ないのかもしれませんが、ただ、ヒストン修飾など多くの生物種で共通なエピジェネティック機構が生命現象の根幹を担っていることを考えますと、やはり本年会が様々な生物のエピジェネティック機構・現象を俯瞰出来る様なものであることが望ましいと思います。奇しくもJenuwein博士が講演の末尾でエピジェネティクスにおける植物研究の重要性を語っておられましたが、今後私も他分野の研究者の方々に興味を持っていた様な研究をぜひこの年会で発表したいとの思いを新たにしました。

(沖縄科学技術大学院大学  
植物エピジェネティクスユニット 准教授  
佐瀬 英俊)

▶ 本年会では、事務局長として運営をサポートさせて頂きました。577人という予想を大きく上回る参加者数となり、盛会のうちに年会を終えることが出来ました。有難うございました。基調テーマ「Breakthrough with New Technologies」のもと、年会では様々な新しい解析技術が発表されておりました。私としては、特に、山縣先生のイメージングについてのご講演を興味深く拝聴しました。まだ気付いていないエピジェネティックな現象が、ライブ・イメージングによって明らかにされていく



のではと予感しました。また、谷口先生のナノポア・シーケンシングは、DNAのみならずタンパク質のシーケンシングにも応用可能とのことで、修飾ヒストンのシーケンシングを1分子レベルで行えるという日もそう遠い未来ではないのかもと大変興奮しました。その他、ポスター発表を含めて多くの新しい情報を得ることができ、本年会は私自身の研究への大きな刺激となりました。

今回、事務局として参加登録手続き等に関わってわかったのですが、意外にも年会参加者の1~2割は製薬、食品衛生関連の企業の方々が占めていました。おそらく、社会的にエピジェネティクスと健康との関わりに関心が高まってきていることを表しているのでしょう。また、残りの参加者のほとんどは大学、公的研究機関に所属する方々でしたが、医療関係の

機関に所属の方は、全体の3割近くを占めていました。医療応用を見据えた研究というのも、この研究会の一つの柱であることは間違いなく感じました。本年会を通じての基礎研究者と医療研究者の交流によって、我々の実生活にも役立つエピジェネティクス研究がさらに発展していくと考えると、医療関係者として年会運営をサポートしたものとしても嬉しい限りです。

最後に、年会参加者の皆様、そして、運営にご協力いただいた多くの方々に心よりお礼申し上げます。有難うございました。

(国立がん研究センター研究所  
エピゲノム解析分野 研究員  
丹羽 透)

### 情報を求めています！！

研究員・ポスドク募集および他の研究会のお知らせなど、ニュースレターを利用して公開してみませんか。年会に関するご意見・ご感想もよろしくお願いたします。お近くの広報委員（中島欽一、牛島俊和、梅澤明弘、角谷徹二、古関明彦各幹事）に気軽にe-mailください。

### 日本エピジェネティクス研究会事務局

東京医科歯科大学 医歯学総合研究科  
分子腫瘍医学分野内  
庶務担当幹事 湯浅保仁  
担当：阿部良子  
住所：〒113-8519 東京都文京区湯島1-5-45  
TEL:03-5803-5184  
E-mail: jse.monc@tmd.ac.jp